

ドイツ観念論の現代的合理性 v. 1.8.

第15回ドイツ観念論研究会・実存思想協会合同研究会（於：京都、2006/9/30）

[ドイツ観念論の『8つの疑問』 <http://ntaki.net/di/7q/index.html>

に書き足していくうちに、長大なものとなってしまい、かえって全体の輪郭がつかめない物になってしまいました。そこで、『8つの疑問』の要旨を手取り早く理解したいときには、このレポート原稿を見て下さい。

（えっ、もっと手早く!? では、『要旨：ドイツ観念論の現代的合理性』を！

<http://ntaki.net/di/7q/ssum.pdf>）]

① 表題の意味

表題は「ドイツ観念論の現代的合理性」ということで、いささかオドロドロシイものになっています。恐縮するばかりです。ここでのドイツ観念論といいますのは、狭い意味でして、フィヒテ・シェリングそしてヘーゲルの3人を指します。カントなどは含んでいません。といいますのは、この3人には共通する発想の基盤・思想的紐帯があるからです。それを今から対象にしようというわけです。

「現代的合理性」としましたのは、ドイツ観念論といいますと、とかく不合理なことやばかげた神秘思想だと考えられる方もいらっしゃると思います。そこで、哲学に関心がある人であれば、誰でも納得していただけるような、説明を目ざしたいということです。それがひいては、ドイツ観念論の偉大さ、たんに歴史的意義をもつということではなく、現代における偉大さの説明にもなるのではないかと、考えるしだいです。

② 3人の思想の共通点

まず、3人に共通する発想の確認をしたいと思います。それぞれが、すべての実在性をもっているものを、想定しています。つまり、フィヒテの自我、シェリングの絶対者、ヘーゲルの実体＝主体、といったものです。そして、「自我はみずからを措定する」のであり、「絶対者とは、自己の外へ出て行くという永遠の行為である」*1し、「実体は主体である」ことになります。

つまり、すべての実在性をもつもの*2が、自らを多重化させているといえます。そこで初めて、それら実在性は現実性をもつと、考えられます。そしてまた、もとの1つに戻るとされます。

問題は、これが一体どういう事態なのか、ということです。

③ 全実在性をもつもの（世界A）の特性

それを調べるために、この3人に共通な全実在性をもつものの特性を、はじめに確認しておきたいと思います。

・シェリングによりますと、絶対者とは「主観的なものでもなければ客観的なものでもなく、ある論者の思惟でもなければ、誰かの思惟でもない、それはまさに絶対的思惟である」*3ということになります。つまり絶対者とは、廣松渉氏の言葉を借りれば、共同主観性のようなものだということ

です。^{*4}

・また、3人が想定する全実在性をもつものは、とにかく全実在をもっていますのでいちおう「世界」だとし、後の議論との関係上「世界A」と呼ぶことにします。するとこの世界Aはそのものとしては、私たちの経験に直接現れはしません。これもシェリングによるのですが、「絶対的 [= 措定する] 自我は、決して対象とはなりえない」と、言われるとおりです。^{*5}

・さて世界AはB, C, 以下へと多重化していきます。つまり自己措定や外化することによって、現実化するのですが、畢竟世界Aとは、多重化そのものであるとされます。^{*6} ここでフィヒテを引用しますと、「自己措定と自我の存在とは、まったく同じである」ということです。

・その上、Aのみでは、また逆にB, C, 以下のみでも、真に存在することはできません。したがって、全実在性をもつAは、近代的な自我すなわち実体的なコギトを、拡大したようなものではありません。そこで3人の思想をいわゆる「観念論」と理解するのは、矮小化だと思います。

以上のような特性をもつ世界Aですが、これがどういうものか、なかなかイメージがわかりません。そこで分かりやすい、それに相応するようなモデルはないかと捜してみます。つまり、存在の仕方が似ているようなものを、私たちの身の回りで探してみようというわけです。

④ <世界の多重化 ≒ メタ言語>モデル

するとメタ言語というものがありますので、これをモデルにして、順にご説明したいと思います。

i) まず、日本語の総体というものを考え、これをA' とします。(A' と、言語を表す記号にはダッシュを付けることにします)。英語やドイツ語などと並んで、日本語A' が存在することは確実です。

- ・この日本語A' を私たちはともに理解しあっていますので、日本人にとって日本語A' は共同主観的な形象といえます。
- ・しかし日本語そのものが、私たちの前に現前することはありません。発話された個々の日本語、例えば「雨が降る」とか「暑い」とかは、日本語の一部あるいは一例でしかありません。(ただしここで発話と言いますときには、書かれたものも含んで考えています)。

たとえ日本語の単語や文法を網羅したリストを作っても、それは単語や文法の表れではありませんが、日本語そのものの現前ではありえません。

- ・また、具体的な発話、例えば「雨が降る」などを、B', C', 以下とすれば、これらのB', C' 以下が一切なければ、当然日本語A' も存在しないことになります。逆に日本語A' というものが無ければ、発話のB' やC' 以下は言葉ではなく、たんなる音でしかありません。つまり、日本語総体のA' 単独では、あるいは個々の発話のB', C' 以下単独では、存在し得ないということです。
- ・こうしてみますと、先の世界Aとこの日本語A' は、存在の仕方が類似しているといえます。

ii) 次にメタ言語につきましては、ご説明の必要もないかとは思いますが、このレポートに関係がある範囲で、論点を押さえておきたいと思います。

メタ言語とは、言語について語る言語ですが、例えば、次のような発話です：「英語では、目的語は動詞の後にくる」。この発話では、英語について私が日本語で語っています。しかし、ここで

は同じ言語同士で考えることにしたいと思います。つまり、「日本語では、目的語は動詞の前にくる」といったもののみに限定します。

iii) さて、このメタ言語の発話を B” とします。(B” と、メタ言語を表す記号にはツー・ダッシュを付けることにします)。B” は日本語でもって日本語を語っており、自己言及的となっておりますが、このメタ B” はもとの日本語総体 A’ とは、一応別物と考えられます。もし同一としますと、「あるクレタ島人いわく、『クレタ島人はみな嘘つきだ』」という、自己言及文のパラドックスが生じてしまいます。

iv) しかしながら、メタ言語 B” も日本語ですので、やはり日本語 A’ から生じていることに変わりはありません。つまり、A’ から生じて、A’ に対しての B” です。A’ から外化 entäußern し、対自化 fuer sich していると、言えなくもありません。

そして B” である日本語の発話、「日本語では、目的語は動詞の前にくる」が、初めて発話されたときには、現実の日本語 A’ の中にはそれまで無かったわけですから、A’ はより豊になったと見なせます。そして、メタ言語 B” は日本語であり、結局日本語 A’ に帰属するのですから、これは「自己内帰還 in sich reflektieren」ということです。

このように見てきますと、メタ言語なるものがドイツ観念論の発想と似かよった面をもつことが分かります。

⑤ ドイツ観念論＝メタ世界論

そこで、メタ言語のメタの意味で、ドイツ観念論の「多重化」や「帰一化」は、メタ世界のあり方を表しているといえます。ところで、metaworld とか Metawelt をグーグルで検索しますと、1万件を超えるヒットがあります。IT関係の用語のようです。そこで、メタ世界と言ったのでは誤解を招くおそれがあるときには、Metakosmismus という用語がいいかと思います。世界の実在性を否定する無世界論は、Akosmismus と言われますので、Metakosmismus も用語としておかしくはありません。ただここで、注意すべき点としまして、

1) これまでメタ言語を手がかりとして、メタ世界なるものを提示するというように、立論してきました。しかし、実際のあり方は、実は順序が逆です。まず世界がメタ的になっています。したがって私たちの意識、共同主観的意識もメタ化し、そして意識に伴っている言語に、メタ言語が生じるという順番が、実状です。

こういうわけで、メタ世界とメタ言語の存在の仕方が類似します。

2) また、言語本来のあり方は、言語以外のものを意味する対象言語です。例えば：「雨が降る」などです。メタ言語はいわば例外です。しかしドイツ観念論においては、自我とか絶対者とか以外には存在しませんので、その多重化（言語でいえば発話ですが）、それはつねにメタ的となります。したがって、言語と世界の構造が完全に対応するというものではありません。

⑥ 3人の相違点

今までは、フィヒテ・シェリング・ヘーゲルに共通する発想を問題としてきましたが、これから3人の相違点を見たいと思います。

ふつう常識的といえますか、「公民・倫理」的な知識では、3人の哲学をそれぞれ「主観的観念論／客観的観念論／絶対的観念論」と特徴付けています。しかし、3人の「自我／絶対者／実体＝主体」などは皆、すべての実在性を有するという設定になっていますので、哲学的にはあまり意味があるとは思われません。

むしろ、3人それぞれのメタ化の運動の仕方の違いに、注目したいと思います。これからの議論は、自分で言うのもなんですが、少し荒削りにして、削り間違ったところや見落としが多々あるかもしれません。後でご指摘下さればと思います。

● まずフィヒテですが、彼においては全実在性を有するもの、すなわち全体者である A が自己措定してできた B, C 以下は、すべて A から直接生じるといえます。B, C 以下は A に対しては個別者ですが、それぞれが全体的な世界です。後期の代表作『幸いなる生への導き』では、B, C 以下に相当する、低次の感覚的世界から最高次の学問的世界まで、都合5つの世界が生じます。そして、B, C 以下のどれかは生じているのですが、どれも同じく生じえる可能性をもっているとされます。^{*7}

もっともこれら5つの世界は、絶対的存在すなわち私たちのいう全体者 A が、直接に外化したものではありません。私たちが見る見方によって生じる世界とされます。^{*8} したがって、全体者 A の多重化の例としてここに登場させるのは不相当であるという、ご批判があるかとも思われます。しかし、これらの世界は私たちの心次第でどうこうなるものではなく、フィヒテによりますと、「神的存在の現存 Dasein と統一されて永遠に存在しており、[ただ]一つの意識 [=神的存在] の必然的規定性」^{*9} です。具体的な論拠は今回は省略させていただきますが、以上のようなこともあって、私たちとしては前述の5つの世界を、メタ化の運動の産物として扱ったしだいです。

また、『幸いなる生への導き』は、フィヒテの後期のものですし、宗教講演ですから、そうしたものを持ち出すのはいかがかという、ご指摘もあるかと思えます。けれどもフィヒテが本書で述べるころでは、『全知識学の基礎』以来^{*10}、哲学的見解は少しも変わっていないということです。そして一般向けの宗教講演とはいえ、第一講演での最初から、「愛は、それ自体としては死せる存在を、いわば反復した2重の存在へと分かち」^{*11} と述べています。つまり私たちのいうメタ化の運動を提示してしまして、哲学者フィヒテが全力を投入したものになっています。

● 次にシェリングに移りたいと思います。彼によれば、自我自体の中に、すなわち全体者 A 自体の中に、絶対的な対置 *Entgegensetzung* があり、そのため B, C 以下を産出する運動が可能となります。^{*12} なるほどフィヒテにおいても、『全知識学の基礎』に見られますように、自我は自己措定していくにあたって、絶えず自己対立 *Widerstreit* に付きまといわれていました。しかし、そもそも全体者 A のうちに対置が存在しているとまでは、言っていなかったように思えます。

しかもシェリングにあっては、直接的には C は B から、D は C からと、個別者から個別者へ継続的に生じます。連続して *in Kontinuitaet*, 進展 *Evolution*, 継起 *Sukzession* などの語句が使われています。^{*13} すなわち、B, C 以下の各「産物は、ふたたび [後続の] 諸産物へと分解」^{*14} するのです。この点に、彼の自然哲学の意義があるのではないかと思います。

そして産出運動の出発点と終局点は同じになると、主張しました。^{*15} この論点は、これだけでも限りませんが、通俗的な解説書ではヘーゲルの思想だとされることが多いようです。

● 最後にヘーゲルですが、彼は個別者のBから出発し、C、Dと必然的に進行してそれが円環をなすのは、それぞれの個別者がもつ自己矛盾によるとしました。これは、シェリングにおける全体者Aの中の絶対的対置を、すべての個別者の内へと移行させた形になります。(ここで個別者のB、C以下と申しますのは、例えば『精神の現象学』における「このもの」や次の「物」、そして『論理学』での「有」や次の「無」といった、各段階を指します)。

ところで、このような全体者の自己内対立から、個別者への自己内対立の移行は、当然可能だと思われまふ。と申しますのは、個別者といひましても、フィヒテに戻って申しますと、全体者である自我が自己指定したものです。したがひまして、ある意味で全体者と個別者は、イコールの関係にあります。そこで全体者のもっている諸契機は、シェリングの言う絶対的対置の契機も含めまして、個別者に引き継がれることになります。

とはいへ、万物が自己内に矛盾を抱えており、その矛盾が万物をして、他のものへと発展させる原動力となるという発想は、ヘーゲル独自のものだということに異論はありません。彼はこの発想を、アカデミックな哲学の場に最初に登場したときから、持っていたようです。イエナ大学に『教授資格・討論提題 Habilitationsthesen』を提出したときですが、その有名な第1テーゼには、「矛盾は真理の規則であり、無矛盾は虚偽の規則である」とあります。この第1テーゼには条件が付いていないので、万物に通用するものだと考えられているようです。

ただし、フィヒテやシェリングと同じくヘーゲルでも、個別者B、C以下は全体者Aから、存在性を与えられていることに変わりはありません。また、自己矛盾といひても、私たちから見るとき、個別者としての個別者が自己内で矛盾を起こすのではなく、各個別的契機と全体的契機との矛盾です。

⑦ 「運動」＝存在自体の方向性 (ベクトル)

さて今まで、3人における全体者Aの多重化のあり方を見てきましたが、問題はこの多重化そのもの、つまりメタ化運動そのものは何であるのか、ということになります。

若干25才のシェリングは、次のように述べています:「実在性の [つまり全体者Aのことですが、この実在性の指定する] 主観と [指定された] 客観への分割は、主観と客観の両項の間に浮動する第3項、すなわち自我の活動によらずしては、まったく不可能である。そしてこの第3項はといへば、2つの対置する両項自体が自我の活動でなければ、不可能なのである」。^{*16}

この主張には、廣松氏風に言ひますと、項に先立つ自我の活動の第一次性が表現されています。この活動、ひいては3人が言うところの事物の根源的な「運動」は、時間・空間における物理的ないし心理的な動きではありません。^{*17} そう申しますと、残る可能性としては意味論的な動きだということになります。そこで3人が言うところの「活動」や「運動」は、誤解を与えないような現代の言葉で表現申しますと、ベクトル、方向性を有するベクトルだということになろうかと思ひます。

昔から、いわゆる「存在」といひものは何か位置を占めるようなものとして、イメージされてきました。しかし、存在そのものないし概念の意味といひものは、位置といひよりむしろ方向性をもったものである、ベクトル的なあり方をしていひ、ということだと思ひます。

ではなぜ「存在とは方向性」なのか、ということですが、これについてはまだ私には分っていません。今後の課題になります。

⑧ フィヒテ登場の背景

話をここで元に戻しますが、そもそもドイツ観念論はフィヒテの「自我は自らを措定する」という主張から始まります。しかしこの主張は、カントやラインホルトまでの哲学史、いえドイツ観念論以降の哲学史と比較してさえ、唐突などいいますか、ずい分と奇妙なものです。そこでドイツ観念論というのは、重要ではあっても哲学史の1つの派生的エピソードに過ぎないと、見なされるかもしれません。しかし、フィヒテが登場する背景を調べますと、やはり生まれるべくして生まれた思想だという感じがします。

フィヒテ登場の背景を考えるとときには、私もやはりシュルツェの著書『アイネシデモス』に、注目したいと思います。この本はカントやラインホルトを懐疑論の立場から批判したもので、『純粹理性批判』が出版されてから11年後に書かれました。当時大きな話題をよび、シェリングやヘーゲルも読んでいます。特にフィヒテは熱狂し、友人宛の手紙には、『アイネシデモス』は、「ラインホルトを突き倒し、カントを疑わしいものとした。そして、ぼくの全哲学体系を根底から引っくり返してしまった」^{*18}などとあります。

シュルツェの批判は多方面に渡っていますが、とくに私が重要に思うのは、因果関係の適用範囲をめぐる問題です。カントによれば、カテゴリーというものは、したがって因果関係のカテゴリーも、ただ経験の対象にのみ適用されえます。カントはこの論理で、彼以前の独断的な形而上学を非難したのでした。ところがシュルツェに言わせると、カント自身がこの論理に反していることになります。

つまり、カント哲学の中枢をなすアприオリな総合判断は、必然的な判断ですが、その必然性は、カントによれば物自体としての心から生じます。だから心が原因となって、必然的な総合判断という、結果が生じることになります。しかし、心自体はむろん経験の対象ではありませんので、因果関係はじつは適用できません。心を原因とするカントの議論は、成り立たないというわけです。^{*19}

また、認識の素材となる表象についても、同じことが言えます。カントによれば、原因である物自体が感覚器官を触発して、表象という結果が生じることになります。しかし、物自体は経験の対象でない以上、原因とはなしえませんが。^{*20}

結局カントの言うように、因果関係を経験の対象のみに適用しえるとしたのでは、哲学としては、大変困った事態になります。といいますのは、個別的な諸科学は、経験的对象の内部で充足できるかもしれません。しかし哲学は経験の成立し方や、経験の意味を問うものですから、どうしても経験外のものを引合いに出さざるをえず、またそこに哲学は成立することになります。ということは、哲学においては因果関係は使えないということです。

すなわちフィヒテにしてみれば、「経験外に存在して、原因となるA」から「結果である経験的对象B」への構図は取れないことになります。そこで、「AからやはりAへ、あるいはA'へ」という構図に至ったのだと思います。

そのとき折よく、これも懐疑論者といわれるマイモンが、意識の能動的一元論と評される哲学を構築していました。そしてマイモンによって、フィヒテの言葉を借りるならば、「全カント哲学が、一般に理解されているという意味においては…根底から覆されたのです」。^{*21}つまり、マイモンによってカントの読み替えが、すでになされていました。そこにフィヒテは、新しい方向性を、やがて「自我は自らを措定する」に到る道を、見たといえます。

したがって、ドイツ観念論が生じたのには、やはり必然的なものがあります。

* 最後に、廣松氏にたびたび言及してきましたので、廣松哲学とメタ世界観との関係を述べて、終わりにしたいと思います。一言でいいますと、いわば立体的なメタ世界を平面に投射したのが、廣松氏の言われる「四肢的構造」とか「関係の第一次性」にあたります。つまり、立体的なメタ世界の共時的 (synchronique) な構造が、廣松氏の哲学だと理解しているしだいです。

ご清聴ありがとうございました。

注

*1 『自然哲学論考』序文への付記 (1803年)。(Schroeter 版 *Schellings Werke*, I, S. 713)

*2 「自我には、実在性の絶対的な総体が帰属する」(フィヒテ『全知識学の基礎』、SW 版 *Saemmtliche Werke*, I, S. 129)

*3 『自然哲学論考』序文への付記 (1803年)。(Schroeter 版 *Schellings Werke*, I, S. 711)

*4 廣松渉氏の共同主観性とは、たんに近代的な個々の主観が融合しているという事態ではありません。主観の側と客観の側が、相即的に形成される構図になっています (これでも、いわゆる「主観-客観図式」に妥協した言い方となっています)。なお、

<http://taki.cool.ne.jp/di/Te/index.htm#Intersub>

に、氏の共同主観性についての拙解説文があります。

*5 『哲学の原理としての自我について』(1795年)、Schroeter 版 *Schellings Werke*, I, S. 91.

*6 フィヒテ:「自己措定と [自我の] 存在とは、まったく同じである」。(『全知識学の基礎』、SW 版 *Saemmtliche Werke*, I, S. 98)

*7 『幸いなる生への導き』第5講の5つの世界を参照。

*8 同書、SW 版 *Saemmtliche Werke*, V, S. 463.

*9 *ibid.*, S. 465.

*10 正確には、『全知識学の基礎』を発表する前年、すなわちフィヒテが「自我」の概念に相当したといわれる1793年以来。*ibid.*, S. 399.

*11 *ibid.*, S. 402.

*12 『先験的観念論の体系』(1800年)、オリジナル版、S. 90.

*13 『自然哲学の体系の最初の構想』Schroeter 版 *Schellings Werke*, II, S. 15.

*14 *ibid.*, S. 5.

*15 『先験的観念論の体系』、オリジナル版、S. 81.

*16 *ibid.*, S. 91.

*17 「[自我の] 活動の概念においては…すべての時間的諸条件のみならず、活動のすべての諸対象も捨象されねばならない。」(フィヒテ『全知識学の基礎』、SW 版, I, S. 134)

*18 H. Stephani 宛、1793年12月の手紙。

*19 『アイネシデモス』、オリジナル本、S. 155.

*20 「[カントの] 因果律の規定にしたがって考えるときには、『表象の根拠ないし原因として、ある何ものかが実際に存在するのか?』と問うことすらできず…」。*ibid.*, S. 177.

*21 1795年3/4月、ラインホルト宛の手紙。